

かりだったろうと、今更ながら思いを馳せるとき、今は亡き両親に感謝の気持ちでいっぱいです。

八 おわりに

戦争は人間だけがする行為です。その戦争に巻き込まれた者として、今生きている事の喜びと、誰の心の中にもある愛の光、愛の灯びをいかなる時にも消さないで灯し続けて行こうと伝え続けていきたい。

釜山からの引揚げ

大阪府 中林 正人

一 終戦の日

その日も、朝からよく晴れて暑い日だった。朝鮮慶尚南道金海国民学校六年生の夏休みも、半ばを過ぎて後半に入っていたが、町外れの山で松根油採取の勤労働員は連日続けられ、この日も朝から汗だくになった末、引率の先生から「南洋はもつと暑いぞ。そんなことでは前線の兵隊さんに顔向けできるか」と、いつものお決まりを長々と聞かされていた。その日、正午にラジオで重大放送があることは、前日に知らされていたが「一億玉砕、一層奮励努力せよ、ということだろう」と、午前の作業終了時にも先生からそれ以上の話はなかった。その日の昼食はどうしたのか、ただ静かな午後だったという思いだけが残っている。

異様なざわめきが広がり始めたのは、夕方近く

になってからだ。日の丸を改変したような太極旗が軒端に立ちだし、牛に曳かせた大八車の上で太鼓が打ち鳴らされ、「万歳、万歳」の声をあげて、大勢の人が夜遅くまで街中を練り歩いた。

遅くなつて帰宅した父が夕食後、灯火管制用の覆いをつけたままの暗い電灯の下に家族全員を集め、放送が天皇陛下自らのお声であつたこと、そして戦争に負けたこと、「これからは何が起こるか分からない。何が起きようと日本人として恥ずかしくないよう、家族全員力を合わせることに」として私には「長男としてしっかりしてほしい」と言つて署に戻つて行つた。父の話聞きながら、私のそのとき真剣に楠公父子桜井の別れを思つていた。

二 生い立ち

私は昭和八（一九三三）年六月十一日に今の韓国、当時の朝鮮慶尚南道蔚山郡凡西面で、朝鮮総督府の警察官として駐在所に勤務していた父、稔と母、愛子の長男として生まれた。凡西に居住す

る日本人は、小学校の先生とよろず屋さん、そして我が家の三家族だけだつたそうで、私の誕生日のときには祖母が凡西まで来てくれたという。

私が数え三つのとき、父は昇任試験を受けるため京城（ソウル）の警察教習所に入り、約一年の京城生活の後、再び慶尚南道に戻り咸陽警察署勤務となつた。この咸陽で弟速雄が生まれている。

昭和十二年、父が道庁警察部勤務となつて、釜山府東大新町に移り、その秋、母の誕生日と同じ日に妹京子が生まれた。待望久しかった女兒とあつて、両親はもちろん大阪の祖父母も随分喜んだようだ。祖父が孫の顔を見に釜山に来てくれた。

三 小学校入学

警察部から北釜山署に転勤となつて、釜山鎮に引越し、昭和十五年四月、釜山第三尋常小学校に入学した。「サイタサイタサクラガサイタ」の最後の学年で、ピカピカ姿で張り切つて写つている写真が残っている。赤煉瓦の校舎、綺麗な花壇、優しいお母さんのようだった中村先生。そして、

毎日朝礼の後で二粒ずつ飲まされた肝油の思い出がある。

三学期の末、父は初めて署長として巨済島に赴任、十六年四月長承浦国民学校に転校した。この年、小学校が国民学校と改称され、「サイタサイタ……」が「あかいあかいあさひがあかい」に変わった。巨済島は、面積約三百九十平方キロメートル、朝鮮海峡に面した韓国第二の大島で、朝鮮戦争当時、国連軍の捕虜収容所が置かれたことで有名になったが、漁業の盛んな平和な島だった。今は島全体が一つの市となり、蔚山と並ぶ韓国造船産業の中心地でもある。昭和六十年ころ、同地からの引揚者親睦会である長承浦会の皆さんに誘われて現地を訪れた母は、当時の署長官舎がそのまま残っているのを見て、懐かしさのあまり門の中を覗き、そこにいた家の人に事情を話したところ、咎めるどころか「それは懐かしいでしょう。どうぞどうぞ」と家の中に案内され、お茶まで御招かれしたと感謝し、「門の中の桜の木も残っていた

し、お父さんが生きていたらねえ」と訪韓前に他界した父を残念がっていた。

学校は、二学年一組の複式学級という小さな学校だった。朗々たる軍艦マーチと共に、ラジオが「帝国陸海軍は本八日未明……」と大東亜戦争への突入と、真珠湾での大戦果を告げた十二月八日の朝、よく晴れてかんと澄んだ青空の下、冷たい初冬の風を受けながら、始業前の校庭で高等科の生徒を中心に、「勝った。勝った」と無邪気に大喜びで騒いでいた。次々と続く捷報しょうほう、快報に、子どもたちだけでなく大人も共に浮き立って、戦勝祝賀の演芸会を開き、私たち子供も詩吟や剣舞を教わったりして参加した。

島では犯罪も無く、警察署の留置場はいつも空いていて、友達と二人で覗きに行き、面白半分です中に入っていたずらをしていたら、巡查さんに鍵を掛けられ、「一時間ほどしてやっとならぬ出来事がある。あのと感感じた鉄格子の不気味さは、今も頭に残っている。」

父や母は土地の人たちの結婚式に招かれたり、お葬式にも参列したりして、私たちもこうしたときの朝鮮の風習を間近に知ることができた。また魚釣りだけでなく、猪、雉き、山鳩などの猟に連れて行ってもらい、こうした山の幸の味を知ったのも、初めて鯨を食べたのもここだった。巨濟島の思い出は今も楽しく懐かしい。

翌十七年四月、弟が一年生に入學してすぐに父が梁山署に転勤となり、梁山国民学校に転校した。この学校は、私たち兄弟を含めて全校生徒二十五人。一番多いのが四年生の六人、少ないのは六年生と二年生の三人で、私の三年生は五人だった。教室は一つで、一〜三年生が東側の黒板に向かい、四〜六年生が西側の黒板に向かっていた。校長先生が一人で全学年を教え、一〜三年生が図画の時間に四〜六年生は習字、一〜三年生が国語なら四〜六年生は算数、というようにうまく時間割りが生まれ、音楽の時間や式のとときのオルガンは、校長先生の奥さんが弾いていた。

落ち着いた小さな町だったが、数キロメートル北には、「靈鷲山通度寺」という大きな名刹があり、境内の清流には鮎がたくさん泳いでいたことを懐かしく思い出す。

夏休みも終わりに近づいて、宿題を片付けるのに苦心惨憺していたとき、突然父親に道庁警察部への転勤命令が出た。これで宿題をしなくて済むと大喜びをして、わずか四カ月で梁山から再び釜山の東大新町に戻り、釜山第二国民学校に通うことになった。

この学校の開校は、明治四十五（一九一二年）一学年四組、全児童数は千人を超え、二階建ての校舎は講堂を中心にしてコの字型に建てられ、標本や教材等の設備も充実した立派な学校だった。講堂入り口の廊下には、いろいろな資料の展示コーナーがあつて、このころは戦局の進展につれて、もっぱら大東亜共栄圏の地図や皇軍の戦果を示す写真、そして「一億一心火の玉だ!」「撃ちてしまむ!」などの戦意高揚ポスターが掲載されてい

たが、あるとき「壁に耳あり障子に目あり」の防諜標語と共に、スパイに関する大きな展示があった。時期的にゾルゲ事件の発覚と、それに関するものだったと思う。

開戦以来、「勝った！ 勝った！」の勇ましい報道が続く中、アツツ島の「玉砕」とかガダルカナル島の「転進」とか、「統制」だ「金属供出」だなどという重苦しい雰囲気は漂いだし、「ぜいたくは敵だ」「ほしがりません勝つまでは」などの標語と共にいろいろなもの町から消え不足していったが、負けるなどとは夢にも思わず、ただ「非常時、非常時と言われ続けて、一体いつが常時なんだろう」と不思議に思ったりしていた。

学校では、上級生を班長に隣組ごとの集団登校が始まった。校門の両脇には当番の六年生が立ち、その前を班長の号令で歩調を取って入って行く。時々、防空ずきんをかぶっての避難訓練も行われた。教室の机の下に潜り込んだ後、指示に従い校庭に集合して終了という他愛のないものだったが、

真剣にやっていた。町では防空壕掘りも始められ、十二間道路と呼ばれた広い舗装道路に、小さなたこ壺式のものも幾つも作られたが、兵隊ごっこなど私たち悪童どもの格好の遊び場になっただけで、緊迫した雰囲気にはほど遠く、のんびりしたものであった。

山腹に建てられた修練道場での禊みそぎや、祝詞の練習にあまり良い印象は残っていないが、学校ごとに編成された海洋少年団が、団旗を掲げ分列行進で郊外の松島海水浴場に集まり、合宿訓練で起こされた手旗信号や、カッターぎょうそう擣漕は懐かしい思い出として残っている。

昭和十九年四月、妹が校区分割で新設された第十(後、第五)国民学校に入学、私たちと別の学校に通うようになった。この年の秋、週一回のパンとお菓子の学校給食が始まった。最初、見本として出てきたパンが大変おいしかったので大喜びしたが、実際に給食が開始された後はどんどん味が落ちていった。またお菜も、ノビルやオオバコな

ど雑草のお浸しや、芋づるの煮付けが出るようになって、いつの間にか中止されてしまった。一体、あの給食は何だったんだらうと不思議になる。

そのころ、一人の海軍士官がりりしい制服姿で来校し、卒業生としての別れのあいさつだと白手袋に軍刀を持ち、「俺はこれから前線に出て行く。君たちもしっかり勉強して後に続いてほしい」と、挙手の敬礼をして去って行かれたことがある。釜山西郊を流れる洛東江の対岸に予科練の飛行場ができて、訓練に励む複葉機「赤トンボ」や「七つボタン」の制服に身を包んだ練習生を見かけるようになっていたころで、皆「次は俺たちだ」と緊張し、興奮もした。相変わらず戦況報道の表現は勇ましかったが、ガダルカナル、マリアナ、フィリピンと戦線はどんどん日本に近づき、サイパン島の玉砕、特攻隊の出撃など、悲痛なニュースが増えていた。朝鮮海峡でも、竣工間もない新鋭連絡船「崑崙丸」が敵潜水艦に沈められるなど、大きな被害がでていた。「船が沈んだら、溺れるより

も鱧ブリカに食われて死ぬ方が多い」「網に掛かった鱧の腹から、人の髪の毛の塊や着物が出てきた」「鱧は自分より大きいものは喰わないから、海では六尺ふんじ禪ぜんを長く伸ばすこと」など、まことしやかな話も広まっていた。

この釜山第二国民学校には、三年二学期から五年終了までの二年八カ月、全部で六校に亘る私の国民（小）学校の中で、最も在籍期間の長い学校となった。戦後三十年経って同窓会「釜山一小会」が誕生し、毎年全国大会が開かれているが、これは引揚げ後懸命に在籍教員、卒業生、在校生の消息を追い続けられた、故吉原先生の大変なご努力によるもので、私も弟も会員に加えてもらっている。この学校の思い出は数々あるが、一番印象が深いのは、卒業式に「万歳、万歳、万歳……花笑い、鳥歌う……」という歌を歌っていたことで、あるとき聞くともなく聞いていたラジオから、突然合唱でこのメロディーが聞こえてきてびっくりした。ベルリーニの歌劇「ノルマ」第一幕の合唱

曲に、明治三十三年三輪義方が詞を付けた「祝歌」という歌だった。

この学校は今、「花郎初等学校」という名門校になっている。四年前の秋、同窓会有志が母校訪問の旅を企画し、大変な歓迎を受けて素晴らしい思い出を生んだ。

四 終戦を前に

昭和二十年四月、兄弟三人が揃って金海国民学校に転入した。一学年一学級の学校で私が六年、弟は四年、妹は二年だった。

金海は、歴史の古い由緒ある落ち着いた町だった。大駕洛国金官伽耶の古都（当時、私たちは任那の日本府が置かれていたと教わっていた）で、天降卵生神話の始祖金首露王と王妃の陵がある。立派な円形封土墳で、現在では綺麗に整備されているが、当時は門や土塀の隙間から比較的潜り込みやすく、ときどき「王陵」に入って遊んでいたが、墳墓の上に登ったときには、日ごろ物静かな墓守の老爺が身を震わせて怒り、警察署に「かく

かくしかじか」と連れて行かれ、父に「人のお墓に足をかけるとは何ごとか。ましてあの王陵は、あの人たちにとっては神武天皇のようなお方のお墓だぞ」と、こっぴどく叱られた。先年五十数年ぶりに金海を訪れた際には、真っ先に「王陵」「王妃陵」に参拝し、その後、学校や警察署、官舎などを探したが、町はすっかり変わっていてよく分からず、少し寂しい思いをした。

金海に移って間もなく、釜山にも夜間、艦載機が来襲したこと、白昼悠々と北に向かって単機で飛んで行くB 29の銀色に光る機影を見たこと、そして高射砲がさっぱり当たらなかつたこと、などが伝わってくるようになった。

五月にはベルリンの陥落、ドイツの降伏が報じられ、いよいよ日本が単独で戦うのかと、身の引き締まる思いだった。沖繩が落ち、本土決戦が現実のものとして叫ばれていた八月、「広島・長崎に新型爆弾。落下傘爆弾か。卑劣極まりない爆弾」と新聞で報じられ、十日には突如ソ連軍が越境、

満州に攻め込んできたと伝えられた。無敵の関東軍がこの事態に備えていたはずなのに、十二日ごろから釜山に向かう汽車は、続々と南下する人で大変なことになっていた。客車が足らず、ほとんどの人が着の身着のまま、貨車に詰め込まれている惨状に、母親たちも炊き出しで駅へ行った。そして、思いもよらなかつたその日がきた。

五 終戦

八月十五日。昼間は静かだった街が、夕方近くからだんだん騒々しい雰囲気になっていった。大声で独立万歳を叫び、大極旗を振り太鼓をたたいて国歌（だと聞いたが、現在の韓国国歌ではなく「螢の光」の曲だった）を歌い、牛車を曳いて練り歩く音が夜つびで聞こえていた。旗も歌も、数日前から密かに用意されていたのだという。夜遅くには、管内の各朝鮮人警官の駐在所が民衆に襲撃され、ただ一カ所を除いてほとんど連絡が取れなくなっていた。家族共々どこかへ身を隠してしまつたのだ。本署でも朝鮮人警官が出勤してこな

くなり、署員は十数人の日本人だけという状態がしばらく続いた。慶尚南道では金海など三署を除いて、道庁の警察本部以下ほとんどの警察署が「自警団」と称する朝鮮人に占拠されて、機能が麻痺する事態が起きていた。父は、残つた他の署の署長と連絡を取り合つて、十七日朝から釜山に行き、翌十八日夕方帰つて来た。警察部で先方のリーダーと、「正規の占領軍に引き継ぐまでの責任は、日本にある。あなた方も今はまだ日本人で、この状態では反乱になる」と話し合い、彼等も了解して解決したのだという。二、三日後、各警察署に陸軍の兵隊一個分隊が派遣され駐屯するようになってからは、町も落ち着いて普段の状態を取り戻していった。

しかし、これからどうなるのか。新聞やラジオもさっぱり状態で、内地の様子もよく分からない中、日韓の統合以前からこちらに来ていて、「内地に帰つても家も土地もない。知っている人もいないし、ここに骨を埋める」という家が何軒かあ

った。

六 引揚げ

九月初め、私たち母子は父を残して大阪に帰ることになった。なかなか引き揚げの動きを見せない人たちに帰国を勧める父に対して、「署長さんが帰らないのに、なぜ！」という声が強くなっていたからだ。「最後まで残って一緒に帰る」という母に、「これからどうなるか分からない。子供たちを頼む。正人、お母さんをしつかり助けるんだぞ！」が父の答えだった。私たちの帰国は皆に知らされた。名残を惜しんで、近所の朝鮮の人たちも何人か来てくれた。皆、「また数年もしたら戻って来られるだろう。家財や荷物はそれまで預かっというあげるよ」と言ってくれた。本当に皆、そう思っていた。

わずかばかりの身の回りの物をまとめて荷造りした。リュックサックには教科書と文房具を詰め、トラックで釜山に出た。父と今度会えるのはいつのことだろうかと思っていたことと、木炭ガスの

煙を吐きながら洛東江畔をがたがた走っていたことだけが記憶に残っていて、金海を離れたその日がいっただったのかは覚えていない。

釜山では、小さな旅籠はたごのような所に泊まった。

赤茶けた電灯の下で、夜中にパンパンと銃声が聞こえ、何度か目を覚まして身を硬くした。

翌日の夕方、大阪まで行くという木造の機帆船に乗った。胴の間に積んだ荷物の上に毛布のようなものを敷いて、そこに二十家族くらいが乗っていたと思う。我が家のお隣は、東北に帰るSさん一家だった。正規の引揚船ではない闇船で、船賃は五百円と聞いたような気がするが、一人分なのか家族全員分だったのか、よく分からない。船は夜遅く岸壁を離れた。こんな船が何隻も出ていたようだ。

目が覚めると、船は藍色の波に乗ってゆっくと上下に揺動しながら進んでいる。困ったのは厠かわやだった。ちゃんとした便所ではなく、木の箱が一個舷側にぶら下がっているだけで、そこにしゃが

み込んで用を足す。箱の床板は真ん中が一枚空けてあって、便はその穴から直接海に落下して、後ろへ後ろへと流れて行く波頭に飲み込まれて消えて行く。最初はおっかなびつくり。男はともかく、母や妹にとつては大変だったが、他に方法はなく、皆そのうちに慣れていった。

対馬もはるか後方に遠ざかっていったころ、それまで順調にボン、ボン、ボンと響いていたエンジンの音が止まり、船員たちの動きが慌ただしくなった。故障が直らないという。何時間もかけて走った距離を、風と波がその半分にも満たない時間で押し戻し、このまま流されると、北朝鮮かソ連領の沿海州に行ってしまうそうだという声が不安を誘い出したころ、一隻の曳船が近づいて来た。陸軍の船舶兵だった人たちで、「若松まで五万円です曳いて行く」という。「着いてから支払う」という返答に、「先払いでないと駄目だ」と、こちらの周りをぐるぐる回り始めた。双方の船長同士が、メガホンを使って大声でやりとりしていたが、ら

ちがあかずと見たかそれともゼスチュアか、曳船が離れていく様子を見せた。諦めて船長は先方の言い分を受け入れることを認めた。曳船から長い柄の着いたトンボ捕りの網が突き出され、船長が五万円の札束を入れた。するするとその網が引込んだ後、向こうの機関音が高くなった。「このまま行ってしまわれるのか」と瞬間緊張が高まったが、ぐるつと回り込んだ曳船の艫とこから引き綱が投げられて、こちらの舳とことしっかり繋がれ力強く動き出した。

夜に入つてようやく若松に着き、機関も修理されたが「もう疲れた」と船長が下船してしまい、船は下関の赤間神宮の下で釜山から交代の船長が来るのを待つことになった。「船はもう懲り懲り、汽車で帰る」と、ここで半数ぐらいの人が降りて行った。結局、下関には数日いた。

新しい船長が来て、ようやく船は大阪に向けて出港した。良いお天気だったが、午後になると穏やかだった周防灘が荒れだした。台風がくるとい

うことで、室積（光市）という小さな港に避難して錨を下ろした。強まる雨風の中を、同じような船が既に何隻か停泊していた。その夜がすごかった。船がギイギイ、ギンギンと悲鳴を上げるようにきしみ、上下左右に振り回され、ものすごい音を立てて周りの船とぶつかる。天板が吹っ飛んだ胴の間の天井や破れた舷側から、猛威をふるう雨風が舞い込み、見えるのは真つ暗な闇の中で真つ白く見える雨。そして聞こえるのは、風の唸りと船がぶつかり合う音に混じって、必死に作業する船員たちの怒鳴り声と、流されまいと懸命に動いているエンジンの音だった。このとき「これが男の仕事！」と感嘆したことが、後に船乗りを目標した私の原点だったように思う。

やっとの思いで夜が明けた。Sさんたち残っていた人も、「もう汽車だ」とここで下船して、私たちと同様に大阪方面に帰る二、三家族だけが船に残った。嵐が過ぎ去った後は穏やかな朝だった。小さな湾の中に幾隻もの機帆船が錨を下ろしてい

た。どの船も破れた船の外板が昨夜の凄まじさを物語っていたが、それさえなければ、どうしてこんな狭い所にたくさん泊まっているんだらうというような、のんびりした光景だった。幸い、水平線下の船体や機械類には破損が無く、船は破れた外板を修理して大阪に向かったが、この台風が、九月十七日から十八日にかけて九州・中国を縦断して日本海に駆け抜けて行った「枕崎台風」で、船はその目の中に入ってしまっていたことを後に知った。

次の日、朝靄の神戸港で、海面から帆柱が四本突き出しているのを見てびっくりしたが、これが終戦直後港内で触雷沈没した練習帆船「大成丸」だったことを、商船大学に入ってから知った。お昼ごろ、船は大阪市尻無川に入り、川筋の船着き場に着いた。その日が九月の何日だったか全く覚えていないが、恐らく二十日か二十一日だったろう。二、三日の予定が二週間ほどもかかったが、無事帰り着いた喜びで母の安ど感は大きかったと

思う。辺り一面焼け野原の中、鳥居がぼつんと立っている神社があった。幼いころ本田で育った母が、「茨住吉さん」だと懐かしがり、拝殿跡の石段に腰を下ろして少し休憩した。夕方近く、祖母と伯母一家の住む堺市南郊の母の実家に帰り着いた。後年、父の死後、母が書いた文章に「九死に一生を得て帰って来た夫が『子供三人が土産でございます』と母に言った言葉が忘れられない」の一節があるが、これは仏壇に灯明を上げ長い間手を合わせていた、この日の母の心境でもあったに違いない。

七 内地

翌日か翌々日、村の国民学校へ兄妹三人の転入手続きに行った。校長室に招じ入れられたが、母のあいさつと事情説明の後、私に向かって出てきた校長先生の言葉は「そうか、負けて逃げてきたんか」だった。私は身体に戦慄が走った。「逃げてきたんと違うわい。大人が負けたんやないか」と叫びたかったが、声が出なかった。「ついて来れん

かもしれんが、まあ頑張りや」の言葉が後に続いた。決して悪気がなかったのかもしれないが、このときの悔しさと惨めさは無かった。心の中で「負けるもんか」と拳を握った。この校長先生には、中学受験前の模擬口頭試問で「将来何になるつもりだ」と聞かれて、「高等商船に行つて船乗りになる」と答えたら、「戦争に負けて、船なんか無いぞ」と言われた。馬鹿にされた思いは消えないが、逆にそれがバネになったような気がして、名前は忘れたが人生の恩人の一人かと思つたりすることもある。

持ち帰つた朝鮮総督府発行の教科書は、国語も算数も理科も、ほとんどそのまま使えた。驚いたのは進度の遅さで、「ええっ、今ごろこんなことやつてるの」というのが正直な気持ちだった。無理もない。今はベッドタウンとして見事な住宅街となつているが、当時は純粹な農村地帯で、中学に進むのは年に一人か二人という所だった。転入当初は和泉弁がしゃべれず、よそから逃げて来た奴

といじめられたが。万事のんびりした小規模校で、すぐに秋祭りの「だんじり」を曳いたり、下校時他地区の生徒と石合戦をしたり、路傍のお地藏さんに供えられたお餅や果物をおやつにして、イチゴ取りに夢中になるなど、結構悪戯鬼の仲間入りをしていた。藁草履の編み方を教わって、毎日それを履いて通学していたが、あるとき村に一軒あった鉄工所の鋳物工場を、六年生全員で見学に行った。真っ赤に溶けた鉄の湯が鋳形に注がれるのを見ながら、父が帰って来なかったら、卒業してここで働くことになるのかな、とぼんやり考えたりしていた。進学希望の調査が行われ、仲の良い友だちが行くという近くの中学校にと家に帰って話すと、復員して病に伏せていた従兄が「駄目だ。絶対に堺中学に行け」と強く言う。結局友人も境中に進路変更した。同じ年に二人も堺中を受けるのは何年ぶりだということで、担任の先生も喜ばれ、補習に力を入れて下さったお陰で、翌春二人とも無事合格することができた。

八 父の帰宅

当時は学校に弁当を持って行くことなく、各自昼休みに一旦家に戻って昼食を取っていた。秋も深まったある日、いつものとおり弟と一緒に戻ると、玄關土間に脱がれた見覚えのある一足の革長靴が目飛び込んできた。頭の中を衝撃が走った。駆け込むと紛れもなく父がいた。卓袱台ちやぶたいの前で、母や祖母、伯母たちに囲まれてあぐらをかき、先に帰っていた妹がその膝の中に座っていた。どんなに早くても、年を越してからだろう、いやもう会えないかもしれないなど思っていたのに、こんなに早く帰って来た。喜びが大きいと御飯も喉を通らないということ、このとき初めて体験した。言葉もろくに出てこない。そのまま飛び出して学校に戻った。

父の話では、占領軍との引き継ぎがスムーズにいき、早く帰れるようになったということだった。私たち同様、やっとの思いで探した小さな閘船で部下と共に釜山を後にしたが、機関故障で一昼夜

漂流、辛くも対馬の厳原に入ることができた。港には翌朝博多に向けて出帆するという貨客船が停泊しており、先輩や同僚、知人もたくさん乗っていたので、早速乗船を申し込んだところ、「満員」を理由にどうしても乗せてもらえず、やむなくお互いの無事と再会を祈って乗船を諦めたという。ところが翌朝厳原を出たこの船は、三十分後、米軍が投下した浮遊機雷に触れて轟沈。わずかに甲板にいた数人が助かっただけで、ほとんど全員が犠牲となってしまったそうで、このとき父たちが乗せてもらっていればまず助かることはなく、私たちが父の死を知ることになるのもいつになったことか、きつと人生の道は異なったものになっていたに違いない。

父の職探しは、なかなか順調には進まなかった。インフレの進行は激しく、切り売りする物もない中で、両親の苦労は並大抵ではなかった。父は、どこかへ出掛けては二、三日帰って来なかったりしたが、闇屋まがいのこともしていたのではない

かと思う。私たちのイナゴやタニシ捕りも真剣だった。新円への切り換えが行われたころ、ようやく警察への復職が決まった。規定ということで、階級を下げての復職だった。父の中学時代の友人 Yさんの世話で、浜寺公園の中にあつた、Yさんの会社の寮の一室を借りることになった。中学の入試発表の日が、引越しの日だった。

九 中学・高校時代

昭和二十一年四月、大阪府立堺中学校に入学した。阪堺電鉄の大小路停留所から三国ヶ丘の高台にある学校まで、焼け跡の中を歩いて通ったが、戦災を免れた鉄筋三階建ての校舎は堂々としていて、アカシアの並木が囲む運動場も広く、上級生には兵学校、士官学校などから復学してきた人も大勢いた。体操の後など四年生、五年生が横に並び、腋毛が生え汗の臭いも強く生まれたままの身体が、大きくなっただけの一年坊主にとっては衝撃的で、畏敬の念を感じるほどだった。少年から青年へと変化し、成長していく過程でのこうし

た体験は、精神的にも貴重なものであつたと思う。新聞紙大の紙に印刷されたものを、自分で四六版大に折りたたんで作った教科書は、代数、幾何、物象、東洋史など名前もいかめしく、がっしりと小さな活字で印刷されており、国民学校と比べていかにも大人の仲間入りをしたようだった。学校は楽しかったが、食糧難は厳しく、弁当を持って行けない日がしばしばあつた。持って行けても、蒸し芋や芋団子がほとんどだったが、同じような仲間がたくさんいた。

夏休みに、街一面に広がる焼け跡や線路脇にはびこり茂っているペンペン草を刈り取って、学校に持って来いという通達が出た。炎天下、一年前の松根油採りを思い出しながら、友人たちと汗を流して刈り取った草を、リヤカーに積んで持って行った。何日か経って、この草で作ったというパンが配給されたが、芋のつるでも何でも、食べられるものならどんなものでも口に入れていたあの時代でも、こればかりはどうにも駄目だった。「馬

糞食つてるみたい」「ボール紙の方がまし」で、どうにもならなかった。後に主食として配給されるようになった玉蜀黍の粉（なんば粉）もひどかったが、このペンペン草よりはずっとましだった。

二学期になって、大阪住吉の小さな借家に引越せた。南海高野線での通学は、戦災による車両不足で蒸気機関車も動員され、客車の窓は板張りで、申しわけのように新書版大のガラスがはめ込まれていたが、いつも超満員で機関車や炭水車にも客があふれ、私たち中学生はわざわざデッキにぶら下がって大和川の長い鉄橋を渡るスリルを味わい、空腹と無い無い尽くしの憂さを晴らしていた。学校では米軍将校による民主主義、多数決の原理、会議の進め方、議長役割と権限などの説明や討論会なども行われ、いわゆる戦後民主主義教育のはしりを受けた。

昭和二十二年、学校制度の大改革で新制中学が生まれ、私たちは最下級生のままで進級することになった。翌二十三年四月、新制高校が発足。大

阪府は隣接する中学校と女学校で生徒を半分ずつ交換して（交流と称した）男女共学をスタートさせたが、堺市には高女が府立と私立の二校があったため、三校を交流させ二校に分ける作業に手間取り、他地区に遅れて七月末ようやく「三国ヶ丘」

「泉陽」の二校が発足し、生徒は居住地で振り分けられて、私は泉陽の方に分けられた。市街の中心地区にあった旧府立高女は、戦災で大半の校舎を失っていたので、私たち併設中学三年生は、焼失を免れた旧市立高女に仮住まいで新制四中・五中と半年間同居し、二十四年四月高校一年生になつてしばらく旧府女跡の本校に戻つた。

父が警察を辞めた。山口判事が闇を拒否し、餓死されたところである。大阪市内から郡部に勤務署が替わっていたが、悪質な闇商売などの巨悪には目をつぶり、ささやかな買出しを容赦なく摘発するなど、弱者を狙い撃ちすることに我慢がならず、度々上司と衝突した挙げ句の果てらしい。小さな業界団体の事務局に職を得たが、母も夜遅く

まで手内職に精を出し、私たち兄弟も新聞配達をして家計を助けた。まだ新聞が専売制に戻る前で、各紙表裏二頁だけの新聞を朝日、毎日、時事、産業経済など数紙を一括して、四百五十〜五百軒配っていた。朝刊だけで給料は月三十円だった。そのうちに、正月には特別頁が付くようになり、折り込み広告も入り始めたが、これは担いだ新聞の束が真ん中だけ膨らんで、配っていくほどにガサガサになつて閉口したが、折り込み料が付くので大いに有り難かつた。大学進学も諦めざるを得ないと思っていたが、この新聞配達と育英会奨学金のお陰を受けて、幸い神戸商船大学に入学することができ、船乗りになるという願が叶つた。

十 父からの話

父の話では、昭和二十年の暮れには北朝鮮に移動することが予定されていたという。二年前に転勤された父の先輩は、人民警察を称する者に「ちよつと相談に？」と言われて出掛けたまま銃殺されて鴨緑江に流されたと密かに伝えられただけで、

ついに帰宅しなかった。それからの家族の苦労は、まさに藤原ていさんの「流れる星は生きている」そのものだった。半年終戦が遅れていたら、私たちの人生もどうなっていたか。父の同僚の中にも二、三年の投獄を強いられた後、帰国された方がいる。また「ここに骨を埋める」と金海に残られた方々も、結局は皆引き揚げて来られた。「署長さんが引き揚げた後はとても……」とのことだった。

成人してから、かねて疑問に思っていたことを父に聞いた。「なぜあのとき、金海署は占拠されずに残ったのか。また無事に早く帰国できたのはなぜか」それに対して、父の答えはこうだった。「戦争中、内地での労働力不足を補うため、朝鮮の人を徴用していたが、戦争末期には応募者だけでは足りず、各地区ごとに人数を割り当て、応募者が満たない地区では、畑で働いている人などを強制的に徴用するようなことをしていた。大変に無茶だが、立场上反対はできず、苦肉の策として内々

地区長に強制徴用日を知らせ、その日は男を外に出させないようにした。これが感謝されていたのだろう。占拠されなかった他の署も、同じようなことをしていた。しかし戦争が長引いていたなら、こうしたこともできなくなっただろうし、露見したら間違いなく腹切りものだった。だから私の引揚げ後、もう遠慮することは無いと乱暴する者が出てきたと聞いたときは、本当に残念だった」朝鮮に渡って警察官になったことについては「中学卒業だけの学歴でも努力に応じて昇進できたし、植民地加俸が付いて内地よりも給与が良かったからだ」と答えた父にとつて、敗戦は人生の挫折でもあったのかもしれない。亡くなって既に二十数年が過ぎた。

十一 戦後の釜山訪問

商船大学を出て、船舶機関士となった。戦後初めて韓国に行ったのは昭和三十八年の春、欧州航路の復航で釜山に入港したときだった。当時上陸する乗組員はいなかったが、どうしても上陸した

く、船長にお願いして通船を出してもらった。税関吏の冷たく厳しい目を感じながら、昔の鉄道棧橋に上陸した。十八年ぶりの釜山はほとんど変わっていないかった。牧之島（影島）大橋、三中井百貨店の建物はそのままだった。弁天町の通りは光復路と名を変え、以前よりも賑やかになっていた。竜頭神社は撤去され、その跡は見晴らしの良い公園になっていたが、要所要所に据えられた大砲と、銃を持った兵隊の姿に韓国の緊張を感じた。学校に行くと、幾人もの子供たちに囲まれたが話が通じない。出てきた先生に事情を告げると、快くすぐに校舎に案内され、柱や机の上に彫っていたずらがそのまま残っているのに驚き、懐かしさで胸がいっぱいになった。そして、在校中に入ったこともなかった校長室に通され、集まった数人の先生方との間で話が弾んだ。会話はすべて日本語だったが、校長先生だけは韓国語だった。ゆつたりとした温顔でニコニコと、こちらの話す日本語は完全に分かっておられた。明治時代の校長先生は

こんな人だったかと思わせる、立派な風格の方だった。

町の人も温かかった。住んでいた家の近くの市場ではたくさんの方が集まって来て、一人のお爺さんが通訳をしてくれた。暖簾や看板に「割烹」「小料理」の漢字があり、「和食」の店で握り寿司を食べた。百パーセントは許されないので、粟混じりの飯だったが、ネタは新鮮で安くてうまかった。親爺は、日本語をしゃべれるのは自分だけが、日本のテレビが映るので、店のものも聞くことは皆OK、この子は美空ひばりのファンだと笑っていた。夜間外出禁止令にかからぬように帰船したが、次の航海からは他の乗組員も上陸するようになった。

昭和五十八年秋、再び入港した釜山は大きく変貌していた。目をつぶっていても歩ける思いだった前回と異なり、タクシーに乗っていてもどこを走っているのかさっぱり分からない。竜頭山公園には釜山タワーができ、大きな李舜臣將軍の像が

立っていて、観光客で賑わっていた。学校も校舎が一部建て替えられ、町の看板はハンブルになり、日本語もほとんど通じなくなっていたが、税関吏の表情は穏やかになっていた。

三度目は、前に記したごとく平成十四（二〇〇二）年秋の「金山二小会」での母校訪問だった。

釜山はさらに大変変貌を遂げコンテナの取扱量も神戸、横浜をはるかに凌駕する大港湾都市になっている。福岡から気軽に買物や遊覧に来る若い人も多く、レストランや商店など、市街では日本語が随分と通じるようになっていた。

十二 願い

戦後六十一年、朝鮮植民地化三十九年をはるかに超え、明治政府と李王朝が外交交渉を始めた年から終戦となる年までと同じ歳月が過ぎた。

今や日韓両国共、社会の第一線に立つ人は戦後に生を受け、戦後の教育を受けて育ってきた人たちである。日本の統治時代を実際に体験した世代の人たちは、良くも悪くもその善悪両面を知って

いた。政治面でも外交面でも、それを十分に心得た上で事を処してきた。私たちが身をもって体験した偏狭なナショナリズムが犯す愚を繰り返すことなく、双方共に謙虚にそして真剣に歴史を検証して、共通の認識の上に立って平和を維持して欲しい。心からそう願うものである。